

vivo

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ] vol.256

6-7

June & July 2023

Terry Riley



88

特集 02

テリー・ライリーという 生き方

- 02 テリー・ライリー 88th バースデー・コンサート
- 06 ヒラリー・ハーン ヴァイオリン・リサイタル
- 08 オルガン・レクチャーコンサート Vol.7 19世紀ドイツのオルガン音楽
- 10 INFORMATION

水戸芸術館
ART TOWER MITO

テリー・ライリーという生き方

文：篠田大基

Life happens. (人生にはいろいろなことが起こる) — 2020年に突然始まったコロナ禍は、沢山の人の人生を翻弄しました。音楽家テリー・ライリー(1935年生)も、コロナで人生が大きく変わった一人です。2020年春、彼は84歳でした。

テリー・ライリーは、ラ・モンテ・ヤング(1935年生)やスティーヴ・ライヒ(1936年生)らと並んで、アメリカのミニマル・ミュージックの創始者として知られています。初期の代表作(In C)は、水戸芸術館でも2021年の公演「1964 音風景」でアンサンブル・ノマドにより演奏されました。また彼のアルバム『A Rainbow in Curved Air』(1967)で聴かれるような、テープの録音／再生システムを活用し、反復音型や持続音を多用したサウンドは、ヴェルヴェット・アンダーグラウンドなどのサイケデリック・ロックにも大きな影響を与えました。1970年からはインド古典音楽の演奏家パンディット・プラン・ナート(1918~1996)のもとで20年以上にわたってラーガ(インドの古典音楽で用いられる旋律法)を学び、ライリーは師の流れをくむキラナ流派のラーガの継承者としての顔も持っています。

2020年、ライリーは、9月に参加予定であった「さどの島銀河芸術祭」に向けた視察で2月に佐渡島を訪れ、その後山梨県に3週間滞在する予定でした。ところが3月、新型コロナウイルス感染拡大にともなうニューヨークとカリフォルニアのロックダウンにより、彼は帰国不能の事態に陥ります。ライリーは日本に留まることを決心し、今

も山梨県北杜市で暮らしています。

1977年の初来日以来、彼はこれまで何度も日本を訪れていましたが、とはいえ言語も生活様式も異なる土地での暮らしは必ずしも平坦ではなかったでしょう。しかしライリーの音楽活動は、驚くほど精力的でした。移住から約半年後の2020年9月(まだ多くのコンサートが中止に追い込まれていた時期!)には、佐渡島で88人限定ライブを挙げる。彼は「85歳にして人生の新たな章が始まるとは想像もしていませんでしたが、私の仕事や人生観全般において、最も活力に満ち、最も刺激的な時期の一つとなっています」というコメントを寄せました。翌年には佐渡島にライリーがデザインした音響彫刻(Wakarimasen)が完成。その題名は彼が最初に覚えた日本語で、「学び続け、真実の探求を止めない」という思いを込めたものだそうです。2022年3月にはビルボードライブ東京に登場、5月からは鎌倉で月1回ペースのラーガ教室を開始、7月にはフジロック・フェスティバルに史上最高齢(87歳)での出演を果たしました。

そんなライリーの日々の暮らしが綴られた投稿がTwitterにありました。

Waking up early
Singing Raga
Teaching his disciple
Practicing
Improvising
Playing Playing Playing
Trying new ideas
Creating music
Being a good chef
Eating healthy

Living his own life
Simply
Smiling

Everyday
(朝早く起きる／ラーガを歌う／弟子を教える／練習する／即興する／演奏、演奏、演奏／新しいアイデアを試す／音楽を創る／良き料理人となり／健康的に食べる／自分の人生を生きる／シンプルに／微笑みながら／毎日)



(テリー・ライリー公式アカウント @TerryRiley_info 2023年3月19日のツイート)

素晴らしい生き方ではないでしょうか。コロナ禍の中で偶然訪れていた日本に住むことを決め、ご自身の生き方を貫き、芸術活動をさらに発展させる。このようなアーティストが今、日本に住んでいること、間もなく88歳の誕生日を迎えようとしていること、そして彼の音楽を、沢山の人の人生に知っただけならと思っています。水戸芸術館でコンサートを開催する6月24日、ライリーは日本で4度目の誕生日を迎えます。

テリー・ライリーという体験

文：小沼純一

朝、目覚めます。

ねむさをひきずったまま、しばらくぼんやりと。寢床からすっとはなれ、スムーズに日常に。あなたはどちらでしょう？ いずれにしても、それまでの状態から、からだは日中のモードに移り変わります。

いま、山梨を拠点にしているテリー・ライリーは、目覚めると、まずラーガを唱えるそうです。ラーガは、インド古典音楽において、メロディを生み出す基礎、といえるもの。1日をおくるにあたっての心身の調律がここにあります。

テリー・ライリーは、〈In C〉(1964)で知られています。世界中で、です。スティーヴ・ライヒやポーリン・オリヴェロス、モートン・スボトニックらが初演には加わっていたとか。来年の2024年は(作品生誕)60周年を迎えますが、これまでにさまざまな試みがおこなわれています。西洋楽器のみならず、中国楽器——大きな編鐘も！——やアフリカの楽器がつかわれているもの、最近では山田うんのダンスで、チノサトルの電子音によるものもありました。

1935年、合衆国はカリフォルニア州コルファックスに生まれたライリー。多様な音楽にふれる環境からは遠かったようですが、10代後半にピアニストを目指します。サンフランシスコの大学に進学し、作曲への関心がつよくなりました。ダンスの音楽を手掛けたり、バーでピアノを弾いたり、ヨーロッパへも渡ります。西洋音楽はもとより、マグレブやインドといった非西洋音楽にふれました。合衆国に戻るのは1963年。翌年に〈In C〉が生まれます。

演奏家たちは、番号のついた短い

音型を演奏します。最短で半拍、最長で32拍までの長さを任意の回数くりかえし、さいごの53に至る。タイトルのとおり、ドレミファソラシのハ調——というより、倍音列——の音が同時にひびいているような音楽、でしょうか。音たちはうごいているのに、ひとつのひびきが聴き手を包む。この音の雨のなか、聴き手は細部に耳をむけて音をたどることも、酔いしれることもできます。

テリー・ライリーは〈In C〉をつくった。作曲家だ。ごくスムーズにおもいました。1970年代半ばです。でも、アルバム『A Rainbow in Curved Air』を聴いて、作曲家?と迷いができました。作曲もしているが、演奏もしている。ジャズやロックのミュージシャンにちかいスタンスじゃないか、と。見掛けたら輸入盤のレコードを買い、ユネスコ村でオール・ナイトのコンサートがあるのを気にしながら足をむけることはできず、といった時期を過ぎ、コンポーザー＝パフォーマーという呼称を耳にし、そうか、と膝をたたいたときは、80年代にはいっていました。

テリー・ライリーの活動は、〈In C〉のような何人もの、いわばアンサンブルの演奏とは隔たったところでなされてきました。若き日にカリフォルニアやパリのバーでピアノを弾いていたのも、〈In C〉の成功にみずからが驚愕したあとでも、テリー・ライリーはひとりでの演奏が多い。テープ・ディレ

イや多重録音をおこないはしても、です。映画音楽を担当したときには、複数のキーボードとともに、ソプラノ・サクスが吹奏されています(楽器を失くして、以来、吹いていないよ、と語ってくれましたが)。ひとと一緒に演奏しているものとしては、ヴェルヴェット・アンダーグラウンドのジョン・ケールとのアルバム『Church of Anthrax』(1971)が、すこし後ですが、映画『No Man's Land』のサウンドトラックでシタールのクリシュナ・バットと、また、後年には息子のギタリスト、ギャン・ライリーとのものもあります。

1970年代の大きな変化は、インド古典音楽の声楽家、パンディット・プラン・ナートとの出会い、ラ・モンテ・ヤング、マリアン・ザジラのカップルとともに、ライリーもともに演奏をおこなうようになったこと、です。非西洋的な音楽の実践、と言ったらいいでしょうか。プラン・ナートは、インド音楽だけをやめるのではなく、それまで培ってきた西洋音楽も放棄する必要はない、そうライリーに説いたそうです。

テープ・ループなどを用い、ひとりでの演奏が増えてくるライリーは、たしか



に楽譜に記すことがあまりなくなってきました。かっちり書きこむことはほとんどせず、手元にはメモ程度しかない。メモをもとに、即興的に演奏がひろげられる。そうした例を、リリースされたライブ・アルバムからも聴きとることができます。〈Persian Surgery Dervishes〉や〈Harp of New Albion〉を挙げておけばいいでしょうか。昨年、六本木でおこなわれたライブでは、〈A Rainbow Curved Air〉も演奏されましたが、レコーディングされたものとはかなり異なっていました。ライリーの作品のひとつの方向は、種子というか核というかは生きているし、音型や音階は保たれているけれど、演奏のたびに異なるものなのです。作品は演奏のたびに生まれ変わる。インド古典音楽が、あらかじめ作曲されたものは練習のためのもので、即興こそがこの時間のなかで生きている生身のありようだ、というのとつながりがあるといえましょう。

ひとつの楽曲とは、どのくらいの時間を要するのでしょうか。プラス／マイナスでも、だいたいことはわかる。楽曲をつくったひとなら、なおのこと。でも、かっちりとした、固定された作品という概念でなく、もっとラフに、音楽というくりでなら、そうした時間で予想できるとはかぎりません。音楽は作品をはみだします。ライリーの演奏は、だからこそ、数時間におよぶことしばしば、だったのでしょう。またそれは、音楽の実現が、みずからの日常と日常のなかにながら日常から異なった時空にみずからをもってゆくのです。

1970年代の終わりころ、クロノスクアルテットのヴァイオリニスト、デヴィッド・ハリントンがライリーに弦楽四重奏のための作品を書いてくれるよう依頼してきました。ライリーは譜

面に書くところから離れてしまっていたので謝絶。ハリントンは諦めませんでした。とうとう、作品を手に入れるのです。しかも、です、ひとつ演奏したらつぎ、というふうに何度も。そのおかげで、みずからの手からはなれた作品というかたちでのテリー・ライリー作品は、弦楽四重奏曲が多く目の目をみるようになりました。〈Sunrise of the Planetary Dream Collector〉から〈Salome Dances for Peace〉、〈Requiem for Adam〉、規模が大きい——弦楽四重奏と合唱、プリ・レコーディングされた音源が組みされた——〈Sun Rings〉を経て、つい最近もweb会議でリハーサルに立ち会っていた〈This Assortment of Atoms〉へ。1990年代になるとオーケストラの作品も生まれます。90年代の〈Jade Palace〉から2000年代の〈The Palmian Chord Ryddle〉〈At the Royal Majestic〉へ。

作曲家と音楽作品とのつながりは一筋縄ではいきません。何らかのモチベーションで作曲をしても、作品そのものは作曲家から切り離され、客体としてある。そうしたひとは多いでしょう。他方、作曲＝演奏行為が、それをするでもっと生そのもの、生活そのものにフィードバックし、それがまたあらためて音楽にむいて、ぐるぐる螺旋状に、生と音楽がひとつのものとなるひともいます。テリー・ライリーは、そうした音楽家のひとりにおもえます。

種子は、核はある。さきにふれましたが、あらためてくりかえします。ライリーは種子、核を手に入れます。それを育てあげるのは演奏の場です。そのときで音楽を育てあげます。先にすみずみまでつくりこみ、みずからが演奏するとき、そのときそのときの変化

がないようなかたちでつくりこんだりはしません。きのうときょうは違う。1年前ときょうは違う。ましてや10年20年経っていたら。そうした生育の可能性が、ライリーみずからが携わる作品では、大きなものとしてあります。

わたしが演奏するさまにはじめて接したのは1980年代、ライリーみずからが純正律に調律したピアノでの〈A Harp of New Albion〉でした。あらためて、昨年、ライブハウスで演奏する姿にふれ、すくなくともじぶんでのライリーにおける生と音楽とのありようは確認できたようにおもいます。会場で演奏するために演奏する、ひとにきいてもらう・きかせるために演奏する「以上」の——これは「以下の」でも、「同等の」でもおなじなのかもしれませんが——ものが、演奏行為に、音楽を奏でているからだ全体にはあったのです。わたしの知るかぎり、あまり多くない音楽家のかたち、ではあります。

テリー・ライリーと音楽は「ともにある」もの、共存しているものです。音楽は生とかさなっています。それが感じとれるかどうかはわかりませんが、とも。

昨年10月に一柳慧さん、今年3月に坂本龍一さんが亡くなりました。ともにテリーさんを、また、テリーさんも気にしておられました。テリーさんが滞在されているきっかけ、もしかしたらそのうちのひとつには感染症がありました。テリー・ライリーという貴重な音楽家をこの列島にとどめてくれた感染症は、また他方で、容易にひとと会うことができない弊害を生んでいる——複雑さを、おもわずにはいられません。水戸芸術館での演奏にふられるかたがたは、稀有な音楽家の存在を、演奏を経験されるにちがいないでしょう。

「ピアノの鍵盤の数と同じになるね!」

テリー・ライリー(キーボード、ヴォーカル)インタビュー

聞き手: 大西 穂



—生誕88歳を記念するパースデー・コンサートが水戸芸術館で開催されます。

88.鍵盤の数と同じですね。その意味でもこの誕生日は特別な一日です。アメリカからのお客さんも来て欲しいですね。とてもめでたいイベントになるでしょうし、皆さんにとっても本当にハッピーな公演になるといいですね。良い音楽を創ってみせますよ。

—70年代から日々修行を続けているラーガの重要性とはなんでしょう?

ラーガはインドの古典音楽ですが、音楽家としての基礎を育むのにとっても良いと感じています。旋律にとっても細かな音程を含み、音楽家はそれを明確に聞き取る必要があります。他の歌い手のフレーズを真似てみたりして音楽性を高めるだけでなく、耳をしっかり鍛えないと、ちゃんと歌うことはできません。皆さんもラーガを深く学んでいけば、西洋音楽には無い音の色合

い、陰影のようなものまで聞き分けられるようになりますよ。私の師匠だったパンディット・プラン・ナートは、非常にゆっくりとしたテンポで歌うことに重きを置いていました。他の人であればとても早く歌われる箇所も長く引き伸ばして歌っていたので、メロディ・ラインの微細なディテールも聞き取れるわけです。彼のスタイルは所謂超絶技巧的なそれではなく、インドの古い巨匠が歌ったような、細部により注意が払われた、祈祷の音楽です。そこでは時間が静止しています。ただ同時に音楽は、それを奏でる人そのものを表すものでなければいけません。私には、ジャズなどに見られるような類の即興スタイルもありつつ、私独自の即興スタイルというものが必要なわけです。私がラーガを自分の音楽に持ち込もうとしたのにはそういう理由もあります。

—ここ最近続けている弟子の宮本沙羅との共演では、彼女は演奏するだけでなく、よくダンスもしていますね。

彼女は私のやり方をとても理解してくれています。弟子である彼女には、私が即興に於いて必要と考える明確な事項を幾つか教えてきました。演奏中、彼女は心臓の鼓動のように中心に居てくれるので、私はその外側で漂いながら自由にやりたい演奏ができます。沙羅は活発なダンサーというより、ステージ上で彫刻のようにポーズを取ってゆっくりと動くので、観た人は必要以上に踊りに目と心を奪われる事なく、音楽に対してもじっくり集中

してもらえます。ちなみに彼女とのやりとりは全て即興です。

—様々なスタイルの作曲も魅力的ですが、自身の即興に重きを置くのはなぜでしょう?

即興というのは、リアルタイムで「音楽する」ということです。私はずっと音楽家としてそのように在り続けてきました。小さい頃から「耳」で演奏する事を好みました。よく、ラジオから流れてくる音楽を耳コピーしようと頑張ったものです。私にしてみれば、即興とは自然に音楽が生まれる場です。また様々なアイデアを伝え合うにも、即興こそが一番ダイレクトな方法だと思っています。譜面にいちいち書き起こせないような事も即興では可能となりますし。

—来場するお客様へ一言お願いします。

所謂ミニマリズムとか、自分特有の何かとか、周囲に期待されたり予想されるような事に囚われないようにしています。いつも開かれた状態で居たいのです。自分でも予期しない驚きの数々こそが、音楽を演奏する上で一番面白い要素なので、

2023年3月28日 zoomにて

初出:『intoxicate』vol. 163

(2023年4月)一部加筆

■公演情報

テリー・ライリー
88th パースデー・コンサート

2023.6.24(土) 17:00

全席指定 一般¥3,000

U-25(25歳以下) ¥1,000

稀代の名手が、ベートーヴェンという頂に挑む

ヒラリー・ハーン ヴァイオリン・リサイタル

いただき

文：高巢真樹



©Dana van Leeuwen Decca

止になり、演奏家としてアイデンティティ喪失状態にまで陥ったことが率直に綴られていた。

しかし、パンデミックと同時期に取得したサバティカル(長期休暇)を通じて自らの人生を見つめ直し、一歩踏み出した結果、苦難は彼女を新たな境地へと導いた。現在の心境についてはこんな風に書かれている。

「私は自分が音楽に背を向けたり、舞台と

グラミー賞を3度受賞するなど、稀代のヴァイオリニストとして活躍しているヒラリー・ハーンが、水戸芸術館に10年ぶりに帰ってくる。初めて登場したのは2013年5月だった。リサイタルではJ.S.バッハの無伴奏パルティータ第2番からの〈シャコンヌ〉やフォーレのヴァイオリン・ソナタ第1番などと共に、アントン・ガルシア・アブルルやヴァレンティン・シルヴェストロフなど、彼女自ら同時代の作曲家たちに委嘱した小品を織り交ぜたユニークなプログラムが演奏され、満場の聴衆をおおいに魅了した。今回は、ピアニストの盟友アンドレアス・ヘフリガーとの共演で、ベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタの金字塔とされる第9番〈クロイツェル〉、そしてこの大作家の最後のヴァイオリン・ソナタである第10番が演奏される。まさにこれは聴き逃せない、直球勝負の一夜になりそうだ。

◆コロナ禍を経て新たな境地へ

ヒラリー・ハーンの華麗なキャリアについては、きっと多くの方がご存知だろう。名門米カーティス音楽院にてウジェーヌ・イザイ門下のヤツシャ・ブロッキーに師事し、17歳でJ.S.バッハの〈シャコンヌ〉をはじめとする無伴奏曲を収録したデビューアルバムをリリース。磨きあげられた美音と深い音楽性で世界中の音楽ファンに衝撃を与えた。以来、名門楽団との豊富な共演や、ドイツ・グラモフォンからのCDリリースなど、その活動の充実ぶりは枚挙に暇がない。しかしそんな彼女も大きな影響を被ったのが、ここ数年世界を覆ったコロナ禍だ。指揮者のアンドレス・オロスコ=エストラーダ、フランクフルト放送交響楽団と、ドヴォルザークやヒナステラのヴァイオリン協奏曲などを収録した2022年の最新盤『エクプリス』では、ライナーノーツに、コロナ禍で様々な企画や公演が中

いう神聖な場から立ち去るなんて決してしたくないことに気がきました。音楽は私の言葉ですが、私だけのものではありません。それは古来から地球上にあり、人類を一つに結びつけてくれるかけがえのないもの。もし音楽がなかったら、私たちは共同体としての声を失うも同然です。

◆ベートーヴェンの傑作二選

今回演奏されるヴァイオリン・ソナタ第9番〈クロイツェル〉は、ベートーヴェンが「ハイリゲンシュタットの遺書」を書いた翌年の1803年に作曲された。この手紙には、聴覚の衰えによって絶望の淵に追い詰められながらも、自らの使命—芸術—を成就するまではこの世を去ることなどできない、という不屈の意志が綴られている。作品の初版譜には「まさにコンチェルトアンテのスタイルで、ほとんど協奏曲のように」と書かれており、

ヴァイオリンとピアノが華麗に火花を散らす最高傑作の一つだ。第10番は〈クロイツェル〉から9年後の1812年に書かれた。〈クロイツェル〉の陰に隠れがちな作品ではあるが、明るく典雅な曲想の中にみられる創造性溢れる自由な筆致からは、中期の“傑作の森”を経て、あの後期作品群の深遠な世界への到達を予感させる。いま音楽家として新たな沃野に立とうとしているヒラリーならではのプログラムと言えるだろう。



アンドレアス・ヘフリガー

◆ヘフリガー氏から届いたメッセージ

そして今回は、アンドレアス・ヘフリガー氏から貴重なメッセージが水戸芸術館に届いた。ベートーヴェンのピアノ・ソナタを核に様々な楽曲を取り上げるCD『PERSPECTIVES』シリーズなど、ベートーヴェンという作曲家に特別な思い入れを持つヘフリガー氏。日本語が堪能でもあり、4月初旬に筆者に届いたメールには、「日本ではすでに桜の花が咲き、春たけなわと聞いています。春には間に合いませんが、6月に訪日し、日本の美しい自然を楽しむことができるのを心待ちにしています」という日本語での一文を末尾に添えて、以下のメッセージを英語でお寄せくださった。

◎ベートーヴェンの作品への想い

ベートーヴェンの音楽は、いかなる時においても現代的で、驚きに満ち、魅力的です。煉瓦を一つ一つ積み上げる建築物のようであり、感情の鍛錬も要します。特に私が気に入ってい

るのは、どんな時もその作品解釈に新たな可能性が見出せるところです。演奏の際は、一人の人間として自分の深層心理に潜って感情を音楽に乗せる。その後、それを再び引き剥がす。そうすると音楽が最も純粋な形で輝き、理想的な演奏が舞台の上で生きてくるのです。ベートーヴェンの音楽にはヴァイオリン・ソナタを含め、全てにこうした特徴があるのです。

◎ヒラリー・ハーンとの共演について

ヒラリーとベートーヴェンを演奏できるなんて、夢のようです。私たちはお互いに音楽的直観を信頼し合うことに決めていて、演奏はその度ごとに変化します。ヒラリーは並外れた演奏技術だけでなく、人間性の面でもインスピレーションに溢れたすばらしい人です。

◎コロナ禍を経て思うこと

パンデミックを通じて、私はあらためて大事なことを学びました。それはテノール歌手だった私の父エルスト・ヘフリガー（1919～2007）の教えに

も通じるのですが、リマインダーが必要だったのかもしれませんが、つまり、音楽は音楽そのものに奉仕するために存在する、ということです。音楽はときに、社会が作り上げたものや自我を満足させるものに取り巻かれていることがあります。でもこのコロナ禍において、私は最も純粋な音楽そのものに向き合うことができたのです。

4月10日メールにて
(協力: ジャパン・アーツ)

■公演情報

ヒラリー・ハーン ヴァイオリン・リサイタル

2023.6.6(火) 19:00

ピアノ: アンドレアス・ヘフリガー
全席指定 A席¥8,000、B席¥7,000、
U-25(25歳以下)¥2,500

●曲目

ベートーヴェン: ヴァイオリン・ソナタ 第9番
イ長調 作品47 (クロイツェル)
ベートーヴェン: ヴァイオリン・ソナタ 第10番
ト長調 作品96

18世紀後半～19世紀初頭のバッハ受容

「オルガン・レクチャーコンサート Vol.7」にむけて

文：鴻巣俊博



J.S.バッハ

水戸芸術館の「オルガン・レクチャーコンサート」では、2021年「Vol.3」でJ.S.バッハに影響を与えた音楽家たちを取り上げる「バッハへの道」、2022年「Vol.4」でバッハの生涯と作品を巡る「バッハが歩んだ道」をお届けしました。そして今年7月、バッハ以降のドイツ・オルガン音楽の道筋を辿る「Vol.7」を開催します。ここでは、この「レクチャーコンサート」に向け、バッハの死後からロマン派の時代におけるバッハの位置付けをおさらいしてみましょう。

バッハは本当に忘れ去られていたのか

ヨハン・セバスティアン・バッハ(1685-1750)の作品たちは、彼の死後急速に忘れ去られ、メンデルスゾーンが《マイイ受難曲》を蘇演したことによって名声がよみがえった、という話を聞いたことがある方も多いことでしょう。しかし、バッハほどの大作曲家が忘れられるということがあるのでしょうか。

まず前提として、18世紀には過去の作品を演奏するという習慣はあまりなく、その時代を生きている作曲家の新作が演奏されるのが一般的でし

た。そして音楽の傾向が大きく変わったのもこの時代でした。バッハ作品の多くが音の連なりを編み込むようなフーガや対位法を駆使した多声音楽(ポリフォニー)であったのに対し、和音の支えの上で主旋律が動く和声音楽(ホモフォニー)が主流になりつつあったのです。この変化の中でバッハの音楽は存命中から時代遅れとみなす人も現れ、かつてバッハの生徒だったヨハン・アドルフ・シャイベは、複数の声部が錯綜しているため主声部が聞き取れず不自然で人為的、という旨の痛烈な批判をバッハ作品に向けています。

バッハの死後、作品の演奏機会が減ったことは事実ですが、決して全てが忘れ去られたわけではありません。この時期に最もバッハ作品が大切に扱われていたと考えられる都市がベルリンでした。バッハの弟子だったキルンベルガーが宮廷の音楽顧問として王族を指導し、次男カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ(1714-88、以後C.P.E.)が宮廷チェンバロ奏者を務めたこの地では、フリードリヒ大王の妹アンナ・アマーリア姫がバッハの音楽に心酔し手稿譜を収集、後のバッハ研究で大きな役割を果たすコレクションを残しました。

このベルリンの地に、オーストリア大使として赴任したある人物が、ウィーンの大作曲家たちとバッハ作品を繋ぐ役割を果たしました。それがゴットフリート・ヴァン・スヴィーテン男爵(1733-1803)です。音楽にも造詣が深かった彼は1770年から7年間のベルリン赴任中、前述のキルンベルガーから

作曲を学び、多数のバッハ作品の楽譜をウィーンに持ち帰りました。その後、ウィーンでは宮廷図書館長兼教育長、出版検察長官の要職につき、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンのパトロンとしても資金的にバックアップ、バッハ作品の紹介もしています(映画「アマデウス」にも皇帝ヨーゼフ2世の宮廷要職者の一人として登場)。特にモーツァルトにはベルリンで収集したバッハの楽譜の校訂や演奏を依頼していることから、モーツァルトは彼を通じて多くのバッハ作品に触れていることが分かります。一方、少し若い世代にあたるベートーヴェンは男爵経由でバッハを知る前に、故郷ボンで師を通してバッハの影響を受けていました。ベートーヴェンの音楽の師であるネーフェはバッハが活躍したライプツィヒで〈平均律クラヴィア曲集〉を教材としてピアノを学び、次男のC.P.E.バッハ著「正しいクラヴィア奏法」で作曲の基礎を学んだ音楽家です。ベートーヴェンは子どもの頃から間接的にバッハ仕込みの音楽教育を受けていたといえるでしょう。

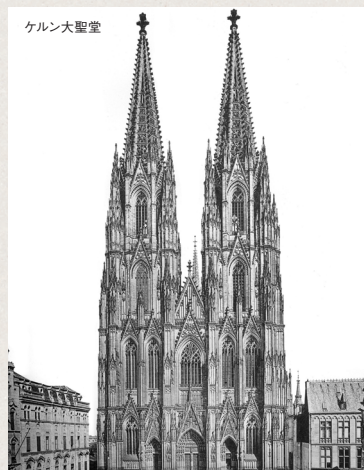
「バッハ」と「ゴシック」

バッハの音楽が時代遅れだと批判した前述のシャイベの著述の中に、バッハと並んで「ゴシック」を批判する文章があります。「ゴシック(独: Gotik)」の語源はかつてヨーロッパ大陸を大移動した「ゴート人(独: Goten)」にあり、ルネサンス期にイタリアの文化人たちが北方の建築様式を侮蔑的に呼んだことが始まりだといわれる語句。「ゴシック建築」と言えばパリ・ノートルダムをはじめとするフランスの大聖堂やケルン大聖堂に代表される、尖ったアーチや飛び梁が特徴

的な建築です。シャイベは古い時代のゴシック建築に対しても「人工的」で「不自然」と述べ、直接的にはないにしろ、バッハの音楽とゴシック建築の類似性を仄めかして批判しています。この「自然」を理想とする考え方の根底には、ジャン＝ジャック・ルソーらのフランス啓蒙主義思想があり、レッシングやシラーなどの作家たちもゴシックに批判的な態度をとっていました。

しかし、このゴシック批判はある人物によって180度覆されます。その人物こそ存じヴォルフガング・フォン・ゲーテ (1749-1832)。彼は1772年の『ドイツの建築芸術について』と題した論評で、ゴシック建築の「崇高さ」「相互に関連しあう細部が集まって調和する巨大な塊を構成する」特徴を賛美しました。その後、ゴシック復興運動は大きなうねりとなり、16世紀に建設が止まったままだったケルン大聖堂の建設が1842年に再開、1880年に完成を見ることとなります。

ちなみに、現在ゴシック建築はフランス発祥であることが通説とされていますが、当時はヨーロッパの国々がこぞって自国の文化であると主張しました。ゲーテは前述の論評で「これぞドイツの建築芸術なのであり、われらの建築芸術なのだ」とまで断言し、ドイツ芸術の象徴としてゴシック建築を



賛美したのでした。ドイツ・ロマン派の旗手ウェーバーは、「バッハの音楽はドイツ的でロマン的、そしてゴシック的である」と性格づけ、この時代の代表的文学者で音楽家でもあったE.T.A. ホフマン (オッフェンバックのオペラ《ホフマン物語》は彼の短編をオムニバス形式で綴ったもの) は、「バッハの音楽はゴシック建築と比較できる」こと、そして「どちらも完璧な芸術である」と主張し、バッハとゴシック建築の間に共通点を見出しています。

ドイツの国民的芸術家へ

ゴシック復興運動とほぼ時を同じくして、19世紀前半ドイツ音楽の世界ではバッハの再評価が進みました。それは、ナポレオンの脅威を経験したドイツの人々がラテン文化に対抗しうる自国の伝統や芸術を求めた時代でもありました。「歴史」や「中世」への憧憬を抱くロマン主義的思想と「18世紀ドイツの偉大な作曲家バッハ」の存在は共鳴し、バッハの評価が不動のものとなったのが1829年3月11日、メンデルスゾーン指揮による《マタイ受難曲》の蘇演でした。

これを実現したのはメンデルスゾーンの師で、ゲーテの友人でもあった音楽家ツェルター率いる「ベルリン・ジングアカデミー」というアマチュア音楽団体。彼らはバッハの楽譜や資料を収集し、カンタータや受難曲を歌うことによってバッハ復興の中心的役割を担っていました。《マタイ受難曲》はツェルターの指揮の下、練習はされていたものの難曲ゆえに公開演奏に至っていませんでしたが、弱冠20歳のメンデルスゾーンの熱意は凄まじく、半ば「若気の至り」のような勢いで公演に踏み切ったともいわれています。客席には国王フリードリヒ・ヴィルヘルム3世をはじめ、ヘーゲルやハイネ、後に高名な歴史学者となる若き日のド



メンデルスゾーン (22歳ごろ)

ロイゼンもおり、ドイツ文化史の中で大きな意味を持つ日となりました。

ドイツの音楽学者ダールハウスが「18世紀の音楽史は(中略)バッハにほとんどあるいはまったく触れなくても書くことができるが、19世紀の音楽史をバッハなしに書くことは不可能である」と述べていることから、バッハが後世の音楽家たちに与えた影響の大きさが窺い知れます。7月2日の「レクチャーコンサート」では、オルガン音楽において19世紀ドイツの作曲家たちがどのような影響を受け、そこからいかに新しい音楽を創りあげたかを、椎名雄一郎さんが紐解きます。お楽しみに!

●参考文献

- 小林義武『バッハ 伝承の謎を追う』(春秋社・1995年)
- 椎名雄一郎『パイプオルガン入門 見て聴いて触って楽しむガイド』(春秋社・2015年)
- 樋口隆一『バッハ探求』(春秋社・1993年)
- 樋口隆一『バッハから広がる世界』(春秋社・2006年)

■公演情報

オルガン・ レクチャーコンサート Vol.7 19世紀ドイツのオルガン音楽 ～ドイツ的とは?～

2023.7.2(日)19:00
全席指定 A席¥3,000、B席¥2,500、
U-25(25歳以下)¥1,000
コーディネーター:室住素子
講師・演奏:椎名雄一郎

●曲目

モーツァルト:ジーク ト長調 K.574
メンデルスゾーン:オルガン・ソナタ 第4番
変ロ長調 作品65の4より 第3楽章、第4楽章
シューマン:《ペダル・ピアノのための練習曲集》
作品56より 第4番 変イ長調
リスト:バッハの主題による前奏曲とフーガ
S.260
ブラームス:《11のコーラル前奏曲》作品122より
ほか

INFORMATION

※以下は4月28日現在の情報です。公演等に関する最新情報は当館ウェブサイトにてご確認ください。

チケット・インフォメーション

《6.24(土)発売分》

■サイトウ・キネン・オーケストラ
プラス・アンサンブル

8.30(水) 19:00 会場:水戸市民会館

■中田喜直の“うた”の世界

9.18(月・祝) 14:00 監修・司会:塚田佳男

■庄司紗矢香(ヴァイオリン) &

ベンジャミン・グロヴナー(ピアノ) & モディリアーニ弦楽四重奏団

9.23(土・祝) 15:00

■茅根順子 メゾ・ソプラノ・リサイタル

11.5(日) 14:00

《7.29(土)発売分》

■水戸室内管弦楽団
第112回定期演奏会

10.21(土) 15:00、22(日) 15:00

■カザルス弦楽四重奏団

11.3(金・祝) 15:00

6・7月の主な音楽イベント

コンサートホールATM

◆ヒラリー・ハーン ヴァイオリン・リサイタル

6.6(火) 19:00

料金 [全席指定] A席¥8,000/B席¥7,000/U-25(25歳以下)¥2,500

◆田中宏明 ピアノ・リサイタル

6.10(土) 17:00

料金 [全席自由] 一般¥3,000/U-25(25歳以下)¥2,000(U-25前売り¥1,500)

◆テリー・ライリー 88th バースデー・コンサート

6.24(土) 17:00 料金 [全席指定] 一般¥3,000/U-25(25歳以下)¥1,000

◆オルガン・レクチャーコンサート Vol.7

19世紀ドイツのオルガン音楽 ～ドイツ的とは?～

7.2(日) 19:00 コーディネーター:室住素子 講師・演奏:椎名雄一郎

料金 [全席指定] A席¥3,000/B席¥2,500/U-25(25歳以下)¥1,000

◆中村真由美・中村佳代 ピアノ・デュオ・リサイタル

7.9(日) 15:00

料金 [全席自由] 一般¥3,000/学生(大学生以下)¥1,500

エントランスホール

◆パイプオルガン・プロムナード・コンサート(入場無料/要事前予約)

□6.18(日) 16:00～16:45 ☆アフタヌーンスペシャル [予定枚数終了]
パヴェル・コホウト & イヴァ・フラヴァーチュコヴァー(ソプラノ)

□6.25(日) 11:00～11:30 森永ナディア真莉子

□7.17(月・祝) 12:00～12:30/13:30～14:00 趙三川

□7.30(日) 13:00～13:45 ☆夏休みスペシャル 永瀬真紀

◆プロムナード・コンサートEXTRA

7.8(土) 12:00～12:30/13:30～14:00 大柴拓(エレキギター)、小林萌里(ピアノ)

2023年5月9日発行(第256号)

編集:水戸芸術館音楽部門 | 中村晃、関根哲也、高巢真樹、篠田大基、鴻巣俊博、高木春佳、木村綾花

発行:(公財)水戸市芸術振興財団 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8 Tel.029-227-8118(音楽部門)

Tel.029-231-8000(チケット予約センター 9:30～18:00・月曜休館) <https://www.arttowermito.or.jp/>

デザイン:K5 ART DESIGN OFFICE. 印刷製本:山三印刷株式会社

編集後記

はじめまして。3月から音楽部門スタッフの一員となりました。新しい出会いと、音楽の宝庫に囲まれてお仕事ができることに感謝しつつ、笑顔で頑張りたいと思います!よろしくお願ひいたします。(綾)

劇団四季「ライオンキング」と新国立劇場「アイダ」を観ました(偶然どちらもアフリカもの)。作品の偉大さはもとより、1つの舞台に関わる人々の力を強く感じる公演で、胸が熱くなりました。音楽や舞台に浸る時間、やはり必要です。(鴻)

ヴェルヴェット・アンダーグラウンドのリーダーだったルー・リードの「史上最低のアルバム」とけなされた「Metal Machine Music」。あれはミニマル・ミュージックだったと思います。変化なく延々と続く、あの長さが重要。(篠)

ムツゴロウさんが亡くなった。犬を飼い始め、著書を読み漁り、その巨大な知性と愛情の深さに崇拜の念を抱いていた。特に「動物交際術」は読むたび胸が熱くなる。ムツさんなら警戒心の強いうちの犬もイチコロだっただろうな。合掌。(て)

念願の、ビール片手に花見! 出来ました。春もあつという間に過ぎて、お待ちかねの夏! 冬服で働いていた脂肪たちを燃焼すべく、日カストレッチ頑張っています! そして、新しく仲間に加わった(綾)さん、これからよろしくお願ひします! (春)

先日亡くなられた坂本龍一さんと、生物学者の福岡伸一さんによる対話の記録「音楽と生命」が刊行された。広く、深く、多方面に造詣の深いお二人が、いまどんな言葉を交わされたのか。じっくり読みたいと思います。(樹)

戦後のわが国の音楽創作と音楽批評を紙の媒体で支えてきた「音楽芸術」が休刊となったのが1998年。その欠落の大きな部分をも「レコード芸術」は埋めてくれたように思う。その貴重な雑誌が70年の歴史に幕を閉じようとしている。(中)

Lucky FM 茨城放送

「水戸芸術館 presents みんなのクラシック」

毎週日曜 7:30～8:00

パーソナリティ:石井哲也アナウンサー

出演:音楽部門学芸員(月替わり)

学芸員がおすすめの曲をご紹介します。クラシックの魅力をお届けする番組です。

▼Lucky FM ウェブサイト

<https://lucky-ibaraki.com/>

▼radiko(ラジオ)でもお聴

きいただけます

<https://radiko.jp/>



好評
放送中!

演劇・美術のイチオシ企画!

ACM劇場

◆水戸市民会館開館記念事業 水戸芸術館連携事業

『ファンファーレ!!』～響き続けた吹奏楽部の物語～

7.13(木)、14(金) 18:00～※13日はプレビュー公演

7.15(土) 13:00～/18:00～ 7.16(日)、17(月・祝) 13:00～

[原作] オザワ部長(『吹奏楽部バンザイ!! コロナに負けない!』ポプラ社刊)

[脚本] 井上桂 [演出] 深作健太

[出演] 荻沼栄音、黒河内りく、田代明、桜井

木穂、鈴木咲人心、辻本みず希、冨岡晃一郎

[演奏出演] 水戸女子高等学校吹奏楽部、

聖徳大学附属取手聖徳女子高等学校吹奏楽部

※料金など、詳しくはHP(ACM劇場)をご覧ください。



現代美術ギャラリー

◆市民会館開館記念事業 アートセンターをひらく 2023—地域をあそぶ

7.22(土)～10.9(月・祝)

[休館日] 月曜日(祝日の場合は翌火曜日)

[開場時間] 10:00～18:00(入場は17:30まで)

※水戸市民会館・京成百貨店と連携。各施設の開

館時間に準じる。

[入場料] 一般¥900/団体(20名以上)

¥700 ※大学生以下/70歳以上、障害者手帳な

どをお持ちの方と付き添いの方1名は無料



曾谷朝絵(鳴る色)2021. 新山口駅北口
Photo: Satoru EMOTO, SARUTO Inc.

茨城の演奏家による演奏会企画

令和6年度に開催する演奏会企画を募集いたします。

【対象】茨城県にゆかりのある演奏家や県内を中心に活動している演奏団体

【申込期間】5.9(火)～6.9(金)

※応募資格や応募方法などは当館Webサイトをご確認ください。



ゲーテは1811年産
アイルファーというワインを愛し、
詩にも登場。その詩に
メンデルスゾーンが曲を
付けているらしいよ。

